

[資料]

ソランケへの書簡

パドモア、アジキウェ、アウォロウォ

落合 雄彦*

Three Letters to Ladipo Solanke:
From George Padmore, Nnamdi Azikiwe, and Obafemi Awolowo

Takehiko OCHIAI

Ladipo Solanke is the founder of the West African Students' Union in Britain. Solanke was born in Nigeria and went to Britain to study law in 1922. In 1925 he founded the WASU in London and devoted most of his active life to the union. The WASU greatly contributed to the promotion of African nationalism and pan-Africanism in West Africa. At present many letters written by African nationalists and pan-Africanists to Solanke are kept at the Gandhi Library of the University of Lagos as part of the Solanke Collection. The aim of this article is to introduce three letters in the collection written by George Padmore, Nnamdi Azikiwe, and Obafemi Awolowo to Solanke, which have never been published. The letters give us a clue to understanding the activities and thoughts of African nationalists and pan-Africanists in the interwar period.

* おちあい・たけひこ：敬愛大学国際学部講師 アフリカ政治

Lecturer of African Politics, Faculty of International Studies, Keiai University.

ラディポ・ソランケ (Ladipo Solanke: 1885/6—1958) は、西アフリカ学生同盟 (West African Students' Union: WASU) という在英西アフリカ人のための学生組織を1925年にロンドンで創設した人物である。

WASUの歴史的重要性を論証するには多言を要しない。WASUは、アフリカ・ナショナリズムが確かな胎動を始めていた両大戦間期にロンドンの地に創設され、J・B・ダンクァー (J. B. Danquah: ゴールドコースト、現ガーナ)、クワメ・エンクルマ (Kwame Nkrumah: ゴールドコースト)、H・O・デイヴィス (H. O. Davies: ナイジェリア)、ジョモ・ケニヤッタ (Jomo Kenyatta: ケニア) といった数多くの卓越したナショナリストを生み出す温床となり、また、マーカス・ガーヴィー (Marcus Aurelius Garvey: ジャマイカ) やW・E・B・デュボイス (W. E. B. DuBois: アメリカ) ら当時を代表するパン・アフリカニストと接触し、アフリカ人とアフリカ系人の連帯と統一を志向するパン・アフリカニズムの思想的潮流を醸成する1つの歴史的拠点ともなった。このようにWASUは、一学生組織としての枠組みをはるかに超えて、アフリカのナショナリズム期における政治意識の形成と発展に重要な歴史的役割を果たしたのである⁽¹⁾。

ソランケは、その発意によってWASUを創設し、また、WASUに入会した学生の多くが勉学を終えたのちにアフリカへと帰国するなかにあっても、終生ロンドンの地に留まり、30年以上の長きにわたってWASUの活動を物心両面から支え続けた。この間、ソランケは、WASUの書記長として、あるいはWASUが運営していたホステルの寮長として、多くのナショナリストやパン・アフリカニストと接触し、幅広い交友関係を築いた。こうしたソランケの知人や友人が彼に宛てて記した数多くの書簡は、ソランケの日記や蔵書とともに、その死後、ソランケの妻によってナイジェリアのラゴス大学に寄贈され、現在同大学付属ガンジー図書館に「ソランケ・コレクション」として保管されている。

本稿の目的は、これまでまったく公刊されず、また研究者の間でその存在さえ知られていなかった、こうしたアフリカ(系)人ナショナリストやパン・アフリカニストによるソランケ宛て書簡を和訳して紹介するととも

に、その簡単な解説を試みることにある。本稿では、以下、筆者が1995年8～9月と97年12月の2度にわたって「ソランケ・コレクション」の調査を行った際に収集した3通のソランケ宛て書簡を紹介する。

資料1 パドモアがソランケに宛てて記した書簡⁽²⁾

1934年2月21日

住所：G・パドモア

クーヤテ氏気付

ムートン＝ドゥブルネ通り8番地

パリ14区

ラディボ・ソランケ殿

法廷弁護士

カムデン通り62番地、ロンドン

私の親愛なる友、そして兄へ。あなたとすべてのアフリカの友人たちに最良の挨拶を送ります。これまでに手紙を書くことができず、申し訳なく思っています。たえず働きづめであるかのように感じさせるほどに、いつもすべきことが山積しているのです。アメリカに戻ったジョーンズ氏から手紙を受け取ったことをあなたに喜んでお知らせします。彼の使命は成功だったのです。その点については、後日、彼がさらに私に教えてくれるでしょうし、あなたにもその進展については手紙で伝えていくつもりです。ところで、WASUの方はどうですか？ あなたたちの機関誌を送ってみたいと思っています。もし可能ならば、私がアクラから直接受け取っている『ゴールドコースト・スペクテイター』以外の西アフリカの新聞をどれほど古い版でもいいので送ってほしいと思います。私は最近の出来事を追いかけていたいと思っているのですが、このためにはアフリカのプレスが最良だからです。私は、すべての若きアフリカの友人たちに大きな感銘を受けました。私たちのあらゆる困難と祖国の悲惨な窮状にもかかわらず、

アフリカには未来がある、と私は感じています。今日の青年たちは目覚めつつあるのです。老いしつつある私たちは、彼らが意気揚々と前進できるように彼らを勇気づけ、励まさなければなりません。ひとたび黒人の青年たちが誇りと自尊心の精神をもてば、あらゆる反動的な力は無きが如しです。たとえ人の肉体を打ち砕くことができても、精神は歩み続けるものだからです。大切なのは、ひとびとの精神なのです。若きプリンス・ケーシーに私の住所を伝えてください。彼と連絡を直接取りたいのです。私はアシャンティに関する1冊の本を読み終えたばかりなのですが、その本のなかで、彼は私に大いなる感銘を与えてくれました。もっと知りたいことがあるし、それを彼が助けてくれるでしょう。

ソランケ、身体に気をつけて、その優れた働きを続けてください。ここにいる私のすべての同志たちを代表して、君に敬意を表します。

草々

ジョージ・パドモア

【解説】

ジョージ・パドモア (George Padmore: 1902/3—1959) は、本名をマルコム・アイヴァン・メレディス・ナース (Malcolm Ivan Meredith Nurse) と言い、主に1930年代中葉から50年代末にかけて活躍した著名なパン・アフリカニストである。英領トニダード出身のパドモアは、24年に渡米し、コロンビア大学、フィスク大学、ハーワード大学等に学ぶかわら、27年にはアメリカ共産党に入党し、コミュニストとしての活動を展開し始めた。彼が本名ではなくジョージ・パドモアを名乗るようになったのは、共産党入党後の28年頃のことであったと言われている。その後ソ連に渡ったパドモアは、プロフィンテルン (赤色労働組合インターナショナル) の黒人問題局の責任者として精力的な活動を展開し、さらにウィーンでの一時滞在をへて、31年にはハンブルグへと移り、黒人労働者国際労働組合会議 (International Trade Union Committee of Negro Workers: ITUC-NW) の機関誌『ニグロ・ワーカー』 (*The Negro Worker*) の編集長として活躍した。パドモアは、33

年にハンブルグで逮捕・投獄されたが、数ヵ月後に釈放され、国外追放処分を受けた。この頃からパドモアは、ソ連およびコミンテルンが、イギリスやフランスといった帝国主義列強との関係を改善するために、アジアやアフリカの植民地解放闘争への支援に消極的な姿勢を取り始めたことに強い不満を抱くようになり、やがて公然とコミンテルンを批判するようになる。そして、パドモアは、ついに34年にコミンテルンから正式に除名・追放された。その後、共産主義からパン・アフリカニズムへの転向を果たしたパドモアは、35年に活動拠点をロンドンへと移し、パン・アフリカニストとしての活動に精力的に取り組み、45年にマンチェスターで開催された第5回パン・アフリカ会議の開催に大いに尽力した。彼は57年にガーナに渡り、59年に没するまでの間、ガーナの初代首相エンクルマの政治顧問として大きな役割を果たした⁽³⁾。

パドモアが、資料1の書簡をソランケに宛てて記した1934年2月は、ちょうどパドモアがコミンテルンからの除名処分を受ける直前の時期にあたる。当時彼は、コミンテルンからすでに除名されていたガラン・クーヤテ（Garan Kouyaté：スーダン、現マリ）とともにパリで生活していた。パドモアは、前年の33年8月、ITUC-NWの解散がコミンテルンによって決定されたことを知ると、ITUC-NWのすべての職を辞し、コミンテルンからの訣別を事実上決定的なものとしていた。そして、それまでプチブル的として批判していた、デュボイスやガーヴィーに代表されるパン・アフリカニズム運動に急速に傾斜していくこととなった。

ジェームズ・フッカー（James R. Hooker）は、その著書『黒い革命家——共産主義からパン・アフリカニズムにいたるジョージ・パドモアの道程』のなかで、こうした共産主義からパン・アフリカニズムへのパドモアの転向を示すものとして、パドモアが資料1よりも4日前の1934年2月17日にパン・アフリカ会議の指導者であったデュボイス宛てに記した書簡を引用している。同書簡のなかで、パドモアは次のように述べている。

「最近、フランスの黒人たちが、『黒人種』の編集者であり、あなたもお

聞きになったことがあるに違いないガラシ・クレーテという若いスーダン人のリーダーシップのもとで会議を開催しました。そこでは、黒人の抱える問題が、現在世界中でみられる経済的・社会的危機や、私たちの人種的な根絶の前兆を示すファシストの脅威との関連で論じられました。それは、私が今まで黒人たちの間で耳にした最も真剣な政治論議でした。そして、同会議では、黒人たちの世界的な統一を達成するための共通の行動プログラムを調整する目的で、黒人世界統一大会を開催するイニシアティブをとることが決議されました。ヨーロッパの黒人学生は、いま行動を求めているのです。こうした姿勢は、最近私が訪れたロンドンの西アフリカ人学生の間にも実に明白にみられました。……アフリカ、アメリカ、西インド諸島、その他の島々の黒人たちの間に、統一のための基盤を作ろうとする私たちの試みをご支援頂けないでしょうか」⁽⁴⁾。

フッカーは、この書簡に関して、「同書簡はまた、この時期までに、パドモアのプロフィンテルンとの訣別がいかに明白なものとなっていたのかを示唆している」と指摘している⁽⁵⁾。デュボイス宛て書簡の4日後に記された資料1は、黒人青年たちが黒人としての人種的誇りをもって前進するように励ましていくべきであると主張する内容となっており、この意味で、資料1は、1934年2月の時点ですでにパドモアがプロフィンテルンと訣別し、パン・アフリカニズムに明確に転向を果たしつつあったとするフッカーのパドモア分析の正しさを再確認するものと言えよう。

なお、資料1のなかに出てくる「ジョーンズ氏」とは、おそらく植民地船員協会 (Colonial Seamen's Association) の指導者であったバルバドス出身のクリス・ジョーンズ (Chris Jones) であったものと思われる。パドモアは、1933年にドイツから国外追放処分を受けてイギリスに渡ったが、その際にナンシー・キューナード (Nancy Cunard) を介してジョーンズと接触をもった⁽⁶⁾。しかし、ジョーンズがアメリカに渡った目的やそこでの具体的な活動については定かではない。

資料2 アジキウェがソランケに宛てて記した書簡⁽⁷⁾

1934年4月23日

ラディボ・ソランケ殿 M. A., B. C. L., LL. B

書記長並びに寮長

西アフリカ学生同盟

カムデン通り62番地、N. W. 1

親愛なるソランケ様

あなたにお便りできることを喜ばしく思います。WASUの運動におけるあなたの努力は、真の奉仕の精神を表しています。あなたのような人がもっとアフリカに与えられるようにと願っています。

今年の夏頃に合衆国を離れる予定です。私は、帰国の途につくのです。2週間あるいはそれ以上の間、ロンドンに滞在したいと考えています。WASUホステルの宿泊料金と施設についてお教えてください。そこに滞在し、ロンドンにいる何人かのアフリカ人の紳士諸君に会いたいと願っています。

ゴールドコースト政府によって採択された法案は、かなり反動的なものです。それは、アフリカ人の側の自由な言論の行使を抑圧しようと意図するものです。WASUが担った役割に感謝します。無論、植民地省から奇跡を期待することはできないでしょう。帝国主義は、ほとんどの場合非情だからです。アフリカ人は、植民地が「文明の聖なる信託」ではなく、ヨーロッパの失業者の避難所を形成しているということを理解すべきです。

「西アフリカにおける報道の自由」と題する記事を同封します。同記事が機関誌『WASU』に掲載可能かどうかご検討頂くために、同記事を担当者にお渡し下さい。この問題の重要性に鑑みれば、より広く周知されることが肝要だと思います。したがって、この記事は同時に多くの新聞に配

給するつもりです。西アフリカの著作権の範囲外では、あなたがイギリスとアイルランドにおける著作権をもっていてください。

返信を頂けること、そしてあなたに個人的にお会いできる機会を楽しみにしています。

草々

ベン・N・アジキウェ

[解説]

ナムディ・アジキウェ (Nnamdi Azikiwe: 1904—1996) は、ナイジェリアを代表するナショナリスト、パン・アフリカニスト、政治家である。アジキウェは、ナイジェリア北部のズングルに生まれた。イボ人出身であったが、北部で育ち、また南部のラゴスなどで教育を受けたために、イボ語のほかにハウサ語や Yoruba 語を理解するようになった。1925年に渡米し、ストローラー・コレッジ、リンカーン大学、ハワード大学、ペンシルヴァニア大学で政治学やジャーナリズムを学んだ。32年から34年まで、ペンシルヴァニア州のリンカーン大学という黒人大学で政治学の講師をつとめた。資料2にもあるとおり、アジキウェは34年にナイジェリアに帰国するが、すぐにゴールドコーストに移り、『アフリカン・モーニング・ポスト』(*African Morning Post*) という新聞の編集長となる。37年にナイジェリアに戻ったアジキウェは、日刊紙『ウェスト・アフリカン・パイロット』(*West African Pilot*) を創刊するとともに、国内政治にも深く関わるようになり、44年には、ハーバート・マコーレー (Herbert Macaulay) とともにナイジェリア・カメルーン国民会議 (National Council of Nigeria and Cameroons) という政党を創設した。60年のナイジェリア独立時にはナイジェリア人初の総督となり、また63年にナイジェリアが共和制に移行した際には初代大統領に就任したが、66年のクーデターで失脚している。79年の民政移管を契機に政界に復帰し、大統領選挙に出馬したが、落選した⁽⁸⁾。

資料2は、アジキウェが、リンカーン大学の講師時代にロンドンのソランケに宛てて記した書簡である。1934年の夏に同職を辞し、祖国ナイジェリアに帰国する予定であったアジキウェは、アメリカからの帰途にロンド

ンに立ち寄り、WASUが経営していたホステルに宿泊したいと考えていた。そのために、WASUのホステルの宿泊料金や施設の状況を事前に知りたいと考え、ソランケに書簡を記したのである。

アジキウェとソランケはともに英領ナイジェリアの出身者ではあったが、資料2が記された1934年4月の時点では、おそらく両者はまだ直接の面識をもってはいなかったと推察される。2人の交友関係は、アジキウェがWASUの機関誌『WASU』をアメリカで入手したことか、あるいは、例えばパドモアのような両者に共通する知人を介して書簡の形で始まったものと思われる。

資料2からは、当時すでに在米西アフリカ人の間でパン・アフリカニズムの論客としての頭角を現わしつつあったアジキウェが、WASUのホステルに滞在することを希望するとともに、自らの記事の著作権をソランケに委ねるなど、WASUをロンドンの活動拠点として捉え、またソランケをロンドンにおける重要なコンタクト・パーソンの1人と見なしていたことがうかがわれる。なお、資料2の書簡を受け取ったソランケは、1934年6月11日に、WASUのホステルの情報を伝えるための返信をアジキウェ宛てに記している⁽⁹⁾。

因みに、ソランケが1958年9月に他界した際、アジキウェは、葬儀にこそ参列しなかったものの、その墓前に、「イギリスにおける西アフリカ人学生の文化的・社会的分野に大いに貢献した、アフリカの偉大なる子の生前の偉業を憶えて」というメッセージを添えた花輪を捧げている⁽¹⁰⁾。

資料3 アウォロウォがソランケに宛てて記した書簡⁽¹¹⁾

1943年8月5日

ラディボ・ソランケ殿
サウス・ヴィラズ1番地
カムデン・スクウェア
ロンドン、N. W. 1

親愛なるソランケ様

あなたの1943年1月19日付の手紙は、今年4月、ラゴスにいる私のもとに届けられました。また、あなたの1943年6月19日付の海外電報も、6月21日にイバダンにいる私のもとに届きました。

あなたの1月19日付の手紙に対する返信がかくも長く遅れてしまったことを、本当に心からお詫びしなければなりません。遅れた理由は、あなたに長い返信をお送りしようと思っていたためです。しかし、長い手紙を書くための時間をみつけようとして手紙を書くことを延期すればするほど、かえってそのための時間をみつけることがより一層困難になってしまいました。それゆえ、無為に過ごすよりも、取りあえず、短いかもしれないけれどもなんらかの返信を差し上げようと決めたのです。

まず最初に、あなたとWASUが私への手紙と海外電報を通して与えてくれた励ましに対して感謝したいと思います。それらは、私たちの大なる祖国の将来に対する限りなき鼓舞激励と絶えざる希望をもって私を満たしてくれました。そして、私はここであなたに厳粛に誓います。私は、総じて言うならば私たちの人種の、特に言えばナイジェリアの、前進と自由のための闘いにおいて、けっしてたじろぎません。

あなたの手紙のなかに、次のような文章がみられました。「しかし、あなたと私たちの間の相違点は、改善のための処方箋と提案に関するものです。私たちは、あなたが提案したような伝統的統治機構の全廃ではなく、

むしろそれらを改善していけると信じています」。

あなたは、この点で私を誤解しています。私は、そのようなことを一切提案していません。私が廃止すべきであると言ったのは、伝統的裁判所です。しかし、「伝統的な大失策」を書いて以来、私はこの考えを修正し、いまでは伝統的裁判所は、もしエグバの伝統的裁判所のような形態に変更されるならば存続しても構わないが、そうでなければ全廃すべきであるという意見なのです。

この点に関しては、私が最近ラゴスで行った「ナイジェリアにおける憲法改革への指針」と題する講演の内容をご覧ください。また、ナイジェリア青年運動の西部地域会議で採択された決議と私が準備した覚書もご参照ください。それらは、6月14日から6月23日の『デイリー・タイムズ』に掲載されています。

こうしたことから、WASUと私あるいはナイジェリア青年運動との間にはその点に関して実質的な相違は存在していないことがわかり頂けるでしょう。

自治政府に対するWASUの要求に関してですが、この問題に対する私の考えは前述の講演のなかに明確に記されています。もし時間が許せば、私が同講演のなかで述べたことをここで詳細にご説明できるのですが……。

これまで私は、この問題に関するWASUのすべての記事を読んできました。機関誌『WASU』の最新号を読み終えたばかりなのですが、この問題に関する私の考えを変更する必要は感じていません。

祖国にいる私たちは、大きな犠牲を払うことへの一致も意志も有してはいないのです。自治政府を求める私たちの要求が支配者によって真剣に受け止められるためには、その両者が必要不可欠なのです。

WASUは、実はそうではないにもかかわらず、あまりにも多くのことを当然のことと見なしているように思えます。エジプトやインドの場合よりも私たちの場合の方が自治政府を獲得しやすいと考えているとするならば、私たちは誤解をしているのです。私たちが大切に育ててきた自由という目標に到達するために、私たちも彼らと同じ「炎の尋問」を経験しなけ

ればならないのです。私は、政治的な革命がイギリスで起きるといった、起こりそうもない予期せぬ出来事の場合を除けば、私たちの場合、自由を獲得するための闘いは実に困難なものになるだろうという厳しい見方をしています。そして、西アフリカの世論のリーダーとなろうとする私たちは、この事実を常にしっかりと認識していなければならない、というのが私の真摯な願いなのです。

北部と南部の関係に関する私の考え方は、同じ講演のなかに明白に述べられています。

最後に、WASUが帝国の中心地で行っている偉大な活動に対して、無条件の敬意を表わしたいと思います。そして、私の同志としての思いを彼らにも伝えてください。私たちはすべて、肩を組み合った同志なのです。WASUの活動について定期的にお教え頂きたいと思います。そして、私は、彼らにできるだけの支援を送るために常に全力を尽くすつもりでいます。

戦争が終結したら、イギリスに行く予定です。そのとき私は、あなたたちの崇高な活動に加わる喜びをえられることでしょう。 草々

オバフェミ・アウォロウオ

【解説】

オバフェミ・アウォロウオ（Obafemi Awolowo: 1909—1987）は、アジキウェと並ぶナイジェリアの代表的なナショナリストであり、政治家である。アウォロウオは、ナイジェリア南部のイケネに生まれた。アベオクタやイバダンなどで教育を受けたのち、事務員、教師、記者、運送業等多くの職業を経験した。やがて労働組合運動に加わって指導者としての頭角を現わすようになり、ナイジェリア青年運動（Nigerian Youth Movement）のイバダン支部において活躍した。1944年に法学を学ぶために渡英し、45年に留学先のロンドンでヨルバ人の文化的団体であるエグベ・オモ・オドゥドゥワ（Egbe Omo Oduduwa: オドゥドゥワ子孫の会）を創設した。帰国後の51年にはヨルバ人を主要な支持基盤とした行動グループ（Action Group）とい

う政党の結党を宣言している。54年にナイジェリア西部州の初代首相に就任し、59年には同職を辞して連邦選挙に出馬したが敗北し、アウォロウォは野党党首としてナイジェリアの独立を迎えた。62年には政府転覆の嫌疑をかけられて逮捕されたが、66年に釈放されている。軍政から第2共和制への移行を契機に、79年に新たな政党であるナイジェリア統一党（Unity Party of Nigeria）を結党して選挙にのぞんだが、敗北した⁽¹²⁾。

アウォロウォとソランケは、ともにナイジェリア出身のヨルバ人であり、またロンドンで法学を修めて法廷弁護士の資格を取得したという経験を共有しているが、両者の政治的な考え方には終生大きな懸隔がみられた。資料3は、ナイジェリアにいたアウォロウォが第2次世界大戦中にロンドンのソランケに宛てて記した書簡であるが、そのなかにはこうした両者の対立が浮き彫りにされている。

両者の対立のまず第1の点は、ソランケがナイジェリアの伝統的統治機構に対して同情的であったのに対して、アウォロウォは伝統的統治機構、特に伝統的裁判所に対して極めて批判的であり、その改革が不可能な場合には同裁判所を全廃すべきであると主張していたところにある。当時のナイジェリアの司法制度は、大きく分けて、イギリスから導入された近代的な司法制度とナイジェリアの伝統的な司法制度の2つによって構成されていた。アウォロウォは、資料3を記した2年後に留学先のロンドンで執筆し、1947年に同地で出版した著書『ナイジェリア解放への道』のなかで、伝統的裁判所に関して1章を裂き、ナイジェリアの伝統的裁判所の運営が非効率的、無秩序、腐敗していると指摘した上で、伝統的裁判所を全廃してナイジェリアの司法制度を近代的制度に一本化すべきであると主張している⁽¹³⁾。

資料3におけるソランケとアウォロウォの第2の相違点は、ナイジェリアが自治政府を達成する速度についてである。WASUは、第2次世界大戦中の1942年4月、英領西アフリカ植民地への内部自治権の即時付与と終戦から5年以内の完全自治政府の樹立を求める覚書をイギリス植民地省に提出している⁽¹⁴⁾。翌年、前述したアジキウェは、15年間の期間をもって

ナイジェリアを段階的に自治領へと移行させるという独自の覚書をイギリス政府に提出しているが、WASUの覚書は、これに先立つ42年の段階において即時内部自治と終戦5年以内の完全自治を求めたものであり、その意味でまさに先駆的かつ急進的な植民地解放の要求であったと言える⁽¹⁵⁾。

これに対して、アウォロウォは、こうしたWASUの早急な自治要求に当初から批判的であり、逆に長い歳月をかけた漸進的な自治政府の樹立を主張していた。「ナイジェリアは国ではない。それは単なる地理的表現にすぎない」⁽¹⁶⁾ という認識の持ち主であったアウォロウォは、ナイジェリアには言語や文化の異なる多数の民族集団が包含されているために、自治獲得のための闘いにとって不可欠な一致と強固な意志がまだ醸成されてはおらず、内部自治権の即時付与を求めるWASUの主張はあまりにも時期尚早にすぎると考えていたのである。この点に関して、アウォロウォは、『ナイジェリア解放への道』のなかで持論をより詳細に展開している。これによれば、アウォロウォは、ナイジェリア人が植民地支配者から権限を継承することができる分野は保健と教育の2分野のみであり、その他の分野に関しては、ナイジェリアの知的エリートが伝統的支配者と大衆の橋渡し役となり、時間をかけて国内に協力関係を築き上げることによって、漸進的に権限の委譲を達成していくべきであると論じている⁽¹⁷⁾。

なお、前述したとおり、ソランケとアウォロウォは政治的な立場においてしばしば意見の相違をみたが、ソランケの葬儀にあたって、アウォロウォは、「西アフリカ学生同盟の創始者として、彼（ソランケ）は、イギリスに学ぶ西アフリカ人の間におけるナショナリズムの醸成と未来に他のいかなる人物よりも貢献した」という内容の弔電を送っている⁽¹⁸⁾。

以上、「ソランケ・コレクション」に所蔵されている多数のソランケ宛て書簡のなかから、パドモア、アジキウェ、アウォロウォがそれぞれ記した書簡について、その翻訳と解説を試みた。

〔付記〕

本稿は、文部省科学研究費補助金（奨励研究〔A〕）（研究課題：「ナショナリズム期におけるアフリカ人学生組織の政治活動に関する研究」）による研究成果の一部である。

（注）

- （1） 落合雄彦「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」、小田英郎編著『アフリカ その政治と文化』所収、慶応通信、1993年、355-356ページ。
- （2） George Padmore to Ladipo Solanke, 21 February, 1934, SOL Box 2. なお、以下、本稿の注記欄で用いるSOLという略称は「ソランケ・コレクション」（Solanke Collection）のことを示す。
- （3） James R. Hooker, *Black Revolutionary: George Padmore's Path from Communism to Pan-Africanism*, New York and London: Frederick A. Praeger, 1967, pp.1-98, 小田英郎「移行期のパン・アフリカニズムとジョージ・パドモア——カリブ海の一パン・アフリカニストの思想と行動」、矢内原勝・小田英郎編『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』所収、平凡社、1989年、186-195ページ。
- （4） Hooker, *Black Revolutionary*, pp.39-40.
- （5） *Ibid.*, p.41.
- （6） *Ibid.*, p.30.
- （7） Ben N. Azikiwe to Ladipo Solanke, 23 April, 1934, SOL Box 2.
- （8） A. Oyewole, *Historical Dictionary of Nigeria*, Metuchen, N.J. and London: The Scarecrow Press, 1987, pp.53-55.
- （9） Ben N. Azikiwe to Ladipo Solanke, 4 July, 1934, SOL Box 2.
- （10） “Chief Solanke Dies,” *West Africa*, 13 September, 1958, p.885.
- （11） Obafemi Awolowo to Ladipo Solanke, 5 August, 1943, SOL Box 9.
- （12） A. Oyewole, *Historical Dictionary of Nigeria*, pp.50-53.
- （13） Obafemi Awolowo, *Path to Nigerian Freedom*, London: Faber and Faber, 1947, pp. 87-101.
- （14） 内部自治政府の即時樹立と終戦5年以内の完全自治政府の樹立を求めたWASU覚書については、例えば、“A Letter from the West African Students’ Union, London,” *Empire*, Vol. 5, No. 1, May, 1942, p. 4を参照されたい。
- （15） 落合雄彦「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」、368ページ。
- （16） Obafemi Awolowo, *Path to Nigerian Freedom*, p. 47.
- （17） *Ibid.*, pp.30-37.
- （18） “Chief Solanke Dies,” *West Africa*, 13 September, 1958, p. 885.